

## 大 賞

### 『銀河鉄道の夜』

宮沢賢治 著、新潮社、1961.

浦 花菜子（心理学部 心理学科 2年）

「さあ、切符をしっかりと持っておいで。おまえはもう夢の鉄道の中でなしに、ほんとうの世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つのほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない。」

『銀河鉄道の夜』は宮沢賢治の作品の中でもとくに有名で、読んだことのある人も多いだろう。主人公ジョバンニが親友のカムパネルラとともに、銀河鉄道の旅を通して「ほんとうのしあわせ」を探す物語である。ジョバンニらが旅する天の川の幻想的な情景描写は、誰もが陶醉するほどの美しさを放っている。そして話を読み進めていくにつれ、銀河鉄道は死者が天国へ向かうための列車であったことがわかる。読後、まるで自分もジョバンニらと一緒に旅をしていたかのような余韻に包まれた。この小さな本にこれほど壮大で美しい世界が潜んでいたことへの驚きと、不思議に心地よいしんどさがぐるぐると胸の中で渦巻いた。

作中には、いじめっ子のザネリを助けようとして溺れ死ぬカムパネルラや、タイタニック号で命を犠牲にした子どもなど、誰かを救うために死んでいく者たちが登場する。しかし彼らの運命は決して可哀想なものではなく、「ほんとうにしあわせ」な運命だったのである。ここには賢治のしあわせに対する思想や深い死生観が表れている。賢治が「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」といったように、みんながしあわせになってこそ初めて自分がしあわせになり得るという考え方が垣間見られる。そしてまた世界のすべての人のしあわせを願い、創作と農業指導に献身した賢治の生涯も、「ほんとうのしあわせ」が何かを追い求める人生そのものだった。

本書は、自分のしあわせや人生についてももう一度考える機会をくれた。いま目の前にいる人でいい。その人の心のほんの隙間に、ほんの小さなしあわせをそっと灯せたなら、どんなにしあわせなことだろう。自分にはそんな地味なことしかできないが、しかしそんな地味なことが、ひとりの、あるいは世界のしあわせにつながるのではないだろうか、そう感じずにはいられないのである。

賢治の願う自己犠牲を伴うしあわせは、ただの綺麗事ではないのかもしれない。しかし『銀河鉄道の夜』を含む彼のほとんどの作品が生前には出版されなかった事実を考えると、ただ己のために書き連ねた37年の生涯で貫き通した信念を、一度は真剣に受け止めてみるべきではないだろうか。紛争、政治、ウイルス、SNS……挙げるときりがないほどに世界は混沌とし、人々はますます利己的な態度に陥っていく。そんな現代だからこそ、一人でも多くの人間が本書を通して人生を渡り歩く「切符」をしっかりと持ち、「ほんとうのしあわせ」を追い求めて生きていく、そんな世界になることを私は願うばかりである。